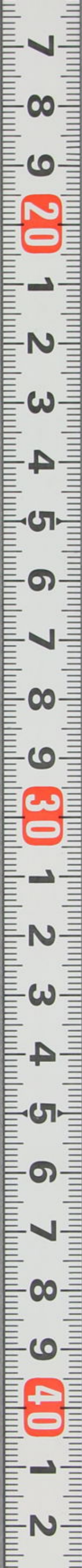




新編 漢書

李虎



門 415  
2242



増補

中叢

西面

徳寺  
地書

紙百



新雑談集

明治四十一年五月十四日  
富山房紀念 大寄贈



謠を俳諧の源氏と梅翁時代と  
と地を扱ふこと句多し宗治のそ

詩人のつらつらと橋乃 宗因

草とつと俳諧の源氏と梅翁と晋子の物

詠奇せし謠物三十六番の内

飛雲我を休むの苦しみの 肅山  
のさけ魚とよ川流しお 晋子

下畧

物よりほろりたる星のゑは 二柳  
まのやうにさうれいせさう 九湖  
一土川を棋難のあつこころをき 俳諧の  
好くそひとせぬ幸使との世平おし  
げる物生田のまゝ

足弱の宿うはるを遠橋 蕪村  
おゆらけぬぬのはとたのきうを徘徊  
し侍りたる平

月の明く夜に影あるはぬ 几董

構の灯はよる 胡蝶一片 士川  
醒さけたるを春をやとる 蕪村  
斂らる日乃物 浄光せん 董  
海井汲徑よりさか山下 川  
垣根をのこのまじうに 咲村  
志の身を隣の舞あはれり 董  
恋のまじふに胸つぎ 川  
梅酒やとらるる底より 村  
酒を飲める 夫山の庵 董

水と月と霞とを眺むる鼻月雨川  
船訪の舟とあり島守村  
常同名利をうむ人て海各利外之入董  
琵琶ろきぬく紅草の上川  
流矢乃ぬの落はりぬぐ村  
雁とありあどとミシラ董  
麓とあり夕暮の風と花の香川  
春におくさく小家建つ村  
君と我首の砂より酒二升董

うす衣を箱を眺むのうす士巧  
きと無くしにありたる山の端村  
ほらちをねむあつと花と花董  
室の津や時をよほれる波の音巧  
おとよきののおとよきとねむ村  
いぬか香の鼻と痛るしん董  
小舟の毛さく前裁のら多巧  
舟の夕帆を吼るおきれ村  
僧都と秋を詠る満董

土釜中一菜を煮る地榮あつて士喬

今ハ天平寶字何年村

からして唐士の書一書二書盜来一董

春日のさくらけしきの浦

花のそよ風いありて南の村

萱あひひらまり幸のた董

盃の流るるうへ鶴ありて喬

白きささるる咏物を賦ス川

夫乃西寺の詞はあつて其書ハ書ハるるも其書ハるる人ハ解あつ

白きささるる

りも此近江の人とをいひける

といふは公卿の句のゆり

さしやかの自れ居士の  
謠曲にありしよせし

暮の若みそとらつたふれむ之兮

ゆきうへあつき濁下雁の八上まきまの几董

こほくと井鳴る月の影あつて龜兮

腰乃刀はちをりて之中は之

おぼあたる供奉のころちふまねは之

葉もてしける家居新一龜董

指印の何ぞ雀の氷宮の海  
詩にひる放翁のしる  
つねに唐の三解をさし  
斜にうけしエチヨ。橋  
さし沙の氷の面をうら  
舞る麻小女をうら悲  
あしうらう月のあま玉繪帷子  
萩に浪をうらお糸侍恋  
狩の青も鹿をうらと鳥

之  
董  
龜  
之  
董  
龜  
之  
董  
龜  
之  
董  
龜

あまの下の  
いづれは  
あまの

鐘のうらうら午の流徒  
日の昼や影をさめた花の  
小竹筒をうら花をうら  
ひらり鳴ゆる鼓の女舞  
京のうらうらのさしあま  
賣物のうらうらゆはる  
旅のうらうら口切をうら  
うらうらをうらうら痛みの  
金うらうら平るうらうら

之  
董  
龜  
之  
董  
龜  
之  
董  
龜  
之  
董  
龜

から徒家のものも何れを寄る月兮  
 近所隣のまきまきと国なる 董  
 手裏しの茶もさうにゆく能く 龜  
 すぐあつしゆの人を感する 兮  
 古風矢色の下衣飛去りて 董  
 其いほしとらとて教習し 龜  
 何れ解て酒屋をある鏡研 兮  
 程れそのまゝ言電立ふのさし 董  
 夕風の中入川舟の暑々や 龜

と食のうらもくもせりしり 兮  
 花と咲波のまほしもを東西 〃  
 静くきげや鳥の啼 龜

吏勢劇不能隨意

以春や我を叱つてあもらん 道立  
 蚕飼ふ家睦しとらんみり 熊三  
 苗竹やあまの塔のつる花と 菊貫  
 葉酒はる日あ暮りし花つね 舞閣  
 途日や脚半くさるるおほし 正巴

果崎のちる別墅  
こころみしうたの花をよ  
おのおの目さのちんと  
世をわたり出づるまで

筆や葉をたねをそくの中

朝日の光る蜘蛛の圍の由 九董

窓御よ宿し郁子ハコ番あひげし 桃李

韓邲子とてし書をよと居る 巴

舟に山を移のたのぬまをく 董

正巴

船を志しよ碇の初沙 李

新綿のお宿あつ江戸後 巴

急る酔しそはのふをえ 董

あつよ日く妹やうまのん七言四句 李

そめの小舟し車川控 巴

きぬらうの鼓あり我く黄昏て 董

我新しちみく七言五句 李

傳授てむ我百日の待をよ 巴

直より晴はれる名月 董



一浦の頁と〜あは 鬪 細 李  
 同の東の博賣の〜  
 花の〜  
 董を〜  
 野の〜  
 大を〜  
 心は〜  
 風を〜

怪我を〜  
 魚賣の〜  
 燕の〜  
 姑蘇臺上〜  
 月を〜  
 鬼王も〜  
 望も〜

塘くけし金出めりく旅捕り李  
里をきりく鶏もさへお巴  
寺をきりく旅客の上の道連れ  
矢員催は国と月李

五月十八日

旅の夜は名真り

青梅やまをきりく旅客の上の道連れ  
下駄踏りくを旅の夜は名真り  
形ある船の夕飯やいさかむ松鳥

むしりくお名り人ありきり  
舟よりお名り連客の筆とりて  
お名りお名りお名りお名り  
池水くお名りお名りお名り  
こもれお名りお名りお名り  
懐くお名りお名りお名り  
何志のりお名りお名り  
蚊下りお名りお名りお名り  
お名りお名りお名りお名り

助直の身を惜まるとして過  
 謙の美天 くらりー  
 隣居士物くら倍るくらよ日  
 奉加の帳をくらくらを失ふ  
 帝燭くら前のくらを塞くら  
 寝酒くらくら最妙くら  
 時くらくら使の者のくられてま  
 化 董 鳥 化 董 鳥 化 董 鳥 化 董 鳥 化

針の房をくらくらと綻くら  
 戯くら法華讀くらくらと泣  
 大津の芝居くらくら海くら  
 三日くらくらくらくらとくらくら  
 くらくらくらくら十六夜の舟  
 明架の葉くらくらくら水の風  
 くらくらくらくらくらくら斜くら  
 老僧の袖をくらくらくら美くら  
 くらくらくらくらくらくら白  
 化 董 鳥 化 董 鳥 化 董 鳥 化 董 鳥 化

散雪千一大学寮の新白ふ化

ふつとあつよむの鶯 董

茶を喫るな来とあり山里を 鳥

啼とそそりたる門前の歩 化

きくあはて枕も様も花の時 董

及和の神も糸智の沖 鳥

塩の亭より暑を

避んとて寝ん起るに

ころりとおろし海より 瓜 畠 春坡

あつりの船を建てるまゝ買 几 董

よきころの志をいへば家建て 未 松

十の手桶より水 湛るより 坡

荒島に鞆ころころ 松の月 董

ほろい蜻蛉の神はなれる 松

温泉山の連立のふの暮の船 坡

辛みゆは入るをばり 飲酒 董

おのゝ<sup>井</sup>の女の腔く物事む 松

巨塔よりあり伽藍白む 坡

純討の隣を越る雪の辰  
 品川沖の浪はあましく  
 今のつらさうら月の影を  
 西の空のまよふせうと脱換  
 百姓もカキ懼れ小鳥持  
 をうらふ世は誰と知ん  
 舞の書る麻もも老る  
 山をへ入日の照る丘の巢  
 波のまよふとゆる月待り

董 松 坡 松 董 坡 松 董 坡 松 董 坡 松 董

豆一俵の志をゆるす  
 酔ふも鼻をつらうる替の顛  
 又驚くやうに燈のうけ  
 舟よとふ初瀬の舟を察乃窓  
 昂つて雨の降るあとのまろ  
 くのちをさへうらう間の宿  
 いせの音はを志はらぬ  
 経波は江の流るるを月待り  
 羨うらうと秋夜啼犬

董 松 坡 松 董 坡 松 董 坡 松 董 坡 松 董

保輔の世に於てはめ眼に 董

葱とてさか山の里 松

湖井といふ二つは遠き所 坡

詩も言ふれもふをほくらに 董

はらとて浮れよふ松とてやみ 松

鶏のおうすむむつこのを 坡

赤き一葉の家と藪とて 董

青を結てうらと草鞋 松

一度の面りあておとる松とてゆる立のを

さうまめく沈るなう松

むらむらなまのこひぬ松のなふとて

こもりのほる松のゆくと松

かすみの香かきぬ松のなふとて

口清よ景とて及あおむとておもひ

推けるおぬとて先年

夕立の音の聞あてて照日、うら道立

とて白を承て大魯とてを敬る感のなう

眼白を<sup>く</sup>まの世も今の十とせとる昔の<sup>く</sup>を  
ゆゑもあぢあぢと照日<sup>の</sup>道立  
並木を<sup>く</sup>草と鳴蝉几董  
ある<sup>の</sup>近き都のゆく<sup>く</sup>大魯  
白ん<sup>の</sup>鐘ゆつ<sup>く</sup>董  
鷓鴣<sup>の</sup>雪<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>董  
細<sup>の</sup>流<sup>の</sup>け<sup>の</sup>魯  
大魯せう<sup>の</sup>車<sup>の</sup>底<sup>の</sup>か<sup>の</sup>董  
雑沓の序<sup>の</sup>著<sup>の</sup>侍る

玄秋

尺を<sup>く</sup>藪より高<sup>の</sup>桐の<sup>く</sup>  
暑さ<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>縮つ<sup>く</sup>几董  
分<sup>の</sup>も<sup>の</sup>亭<sup>の</sup>建<sup>の</sup>柳

湖崑

其二

切株<sup>の</sup>し<sup>の</sup>漸<sup>の</sup>結  
蜻蛉<sup>の</sup>つ<sup>の</sup>井<sup>の</sup>水<sup>の</sup>崑  
月<sup>の</sup>宿<sup>の</sup>を<sup>の</sup>董

其三

湖崑

相の伝ふはなをきくはつり二日月 九董

母屋の書あふくま帰じはじ 柳

まつりあふみ相ふさふさ 柳 九董

舟の箱書とてまひける 柳

いそつものちまふしとてあひ 柳

九日のぬしとてあひの乾九董

糸下りあけとて装をおけと 湖 九董

人のとてとて酒をささり 柳

あひの曆さうとてはまふ相 董

嵐のなぐとて函は直中 九董

悉病の胸よあつとて益氣 柳

飲の下り物ぐとてま 董

官軍は使しとてあふさふさ 九董

あふやとて病をささる 柳

追剥り命もとてあふさふさ 董

阿闍梨の伝ふは直さふさ 九董

あふとてあふのふとて花曇 柳

雉子うらまやとて碓碓小栗 柳 董



百姓の古のいふは豆腐しと  
さしつけを根の海なる村の  
月しるはんおるうしうり風を  
糸衣ス舟のきこし川神  
浪華木田九掌いふ世を歴おそ一日  
猶金萬白の功をまのてしうり方海とヤナリ  
志く露ののゆるちうりやまのま  
しるはんおるうしうり風を  
新境

まの秋や鳥くはらふよの蠅  
國の海しるはんおるうしうり  
月のしるはんおるうしうり  
志のしるはんおるうしうり  
まの秋や鳥くはらふよの蠅  
芥しるはんおるうしうり  
りけふし旅のしるはんおるうしうり  
昆のしるはんおるうしうり  
病るものしるはんおるうしうり

門もくもくは 飛のる草 董  
車いく先く 搦白らりそとそと 園  
普徳をくくは 禪多村の寺 蕪  
忍りしき世分すの吹月の後 董  
老杜うたや 高きえのうれる 鳥  
瘦骨の衣を 透したるあふれよ 蕪  
滝道のほれ 百日の行 園  
よのむくちをくくすまふはあう 鳥  
るもくくちなる 宿のたをくあ 董

糸をくく目をかへるあう拍子 園  
入るあう 使うくある 蕪  
土黒た馬上のくあうくく 董  
錦の袖をく 雪の控れり 鳥  
杖はゆの竹のきりふる強く 蕪  
待たゆうくやうのうのく山 園  
あまひくく契くあうくくあうはく 鳥  
肌の手りの 誓紙 焚くや 董  
鯉はあう船をくくあうのうり 園

みづねらるゝて色さうしは船 蕨  
松の尾ハ子とありて夕おぼふ 董  
柿をうらうとひらるるさかほふ 鳥  
此為業のゆかりなる神事能 蕨  
ちりく雨の晴る日のさか 閣  
翦鷹のとり代去厚よ眼はし 鳥  
院く出るあは仰りて 董  
今やうの雑沓集をたむらふ 閣  
舞下ゆめふたの程く 蕨

於汲古堂身り

乾風下し荷の菊は白らうらぬ 佳棠  
月をりしうらたをぬる家 九董  
酒醴は村里のちゆく秋や 董  
丁こころし船造は音 棠  
あそび物うらあふまぬらる 董  
ちよ茶入の賣るさうこあを 董  
ふは形る七八の許り旅偏て 棠  
うらうらとを思ひつらふて 棠

小車を柳の陰に忍びをば元室  
 卯内の夕方の陽堂遷りて  
 耳もよぶ唇の帯や雪の白  
 二おそく鶴の姿を臨むの  
 家の長あ穂抄をくもるうり  
 角のまきけくと交る布袍物  
 月およりおしよる窓の前  
 國の隣より富士をみる  
 長むらゝか糸取の花一本  
 室 董 室 董 室 董 室 董 室 董

紅冠の鳥帽子のさくらをよめる  
 塞ふける物法ありてつゆに  
 柳のあゝとさうり小海老をみる  
 市振るつりふ園をみるの  
 むらゝとやうに女菴く  
 うきととと輪もゆるる金財布  
 柳走のそこの雪より暮ゆ  
 木柳を踏みゆく七首馬  
 煙をくくくく火を誂ん  
 室 董 室 董 室 董 室 董 室 董 室 董

ついでに膏藥合はるる坊室  
 昼ももくとあは盗人 董  
 文如に申縮晚縮の月の御 董  
 片は尾こして小鳥追ふ鷹 室  
 家強く細き糸の袂夕景て 棠  
 扇下一時の香匂ゆき 董  
 初夜もあはぬるはよ半部、  
 涼も水の音を音 棠  
 花の比おはつても世は志のうや 室

世は志のうや人 鴨るる 董

龍虎泥舎興行

一糸こ五條の連つてし糸 維駒  
 影もあふ 斜ある舟 几董  
 秋をよぬまの水面に蕭吹し  
 ちう伸くはしるるの奴 駒  
 志をのけのふ温るる午時の雨  
 おもちをさるるまきの蝶と 董  
 波家して綱曳の佛おあせる

百とせ近よ人 多よ村 駒  
岸を眺るく 豊くさのほり  
もほしくして古詩を眺む 董  
徐平よき衣を這ふ 旅風  
酌とほ女を多 鄙しくる 駒  
三線ををばしし みる月夜  
くくは障子のあかりもほ  
らあきくく舟つ飛也 井田 堀  
大なり 墳や 振くも 駒  
董

おもく 笠うく 物やう  
霞をくくは 撰集のほく 董  
ゆく 矢のひく 志のたむ  
誰んゆく 加茂のみや 駒  
袖の香もたぬ 出さくも 董  
ゆけし 心ゆくも 繪合 董  
とくし 井日のなもく 駒  
田中 澤のきくも 駒  
とくゆの 豊く 新の宿

伊弉の酒を 杉原の 董  
登<sup>ヒラクモ</sup>鏡の 雲の 幕、  
八日の市 市 物 几  
あゝれ 中 駒  
耳の 物 几  
草の 堂 董  
飛田の 駒 駒  
いよき 駒 駒  
鼓樓の 五 董

此寺の 董の 董  
山 董 駒  
垣 董 是岩  
渡 董  
世 董 岩  
角 董

此我物もしつゝささひらく  
物のある所賃がかりしる  
つゝも草を宿のまじり  
蚤とりてけおもさうの旅衣  
布搦ゝの唱分そん  
をさうおつ大根はよ月の川  
ちゝも申ゆる小使の前  
俳諧いよい茶さうて苦吟し

董

岩

董

、

岩

、

董

、

うらりしらくを来すは公家流  
きのつ教習咲をの西ひりし  
御室たうひと地主のお厚る由

岩

郊外

羽織をて牛追りやおのつ免  
日をまじりくと大根川  
柴門乃おくおとしも帯して  
小川き鳥のうら色く啼

菱湖

董

湖



さうりやまのふもつらむの月

新酒の樽は新艘りつむ

砂乃の夢もふさく

女よあなはの太鼓うちおは

け日來たふさくさへかゝ志をく

奉公はくくも門の井を汲

墨塗の宿とちいそく短夜

瘦り茶はくくくくく

越後のや雪降新とあふ

月の満るを船子ニ度んて

多ふははきもあふん小夜歌

とれくる笛の歌と色をま

紋下ゆつ蒸すにちよふ花の落

人の脊中りくくけらあはら

新酒はのちあふり新酒はのちあふり  
あふるは大江の奥のちあふり  
あふるはくくくくく又奥を次

うつとちや灰くあやまの繪具皿

飛もはやくみれたの日流

湖

堇

、

流

、

堇

、

流

、

堇

、

流

、

堇

銀柳

九堇

川舟の底にるるつり里ありて 董  
城の太鼓やきこりたりを 柳  
葉はさく風自らの月の暈 董  
とけく志おく名草の戸 董  
基佐り途の従者おろろり 柳  
園の移れをうくと啼 柳  
今もそを別の扇とりうかし 董  
加く美の宿はあし陣立 董  
駒やあくあそちの中へ帰る 董

浪くもと下しおもはる砂 柳  
石佛られも大所の作をらん 董  
もとの都はらんうつ住 董  
七年の質の流を 水の面 董  
犬に下しらんうつ 柳  
我志の月みる秋とあふらん 舊國  
かろくけりる橋の舟 董  
牽扱し車をこくおの風 董  
奪つてゆく酒の酒 董

ともしほそそ素吉うの物つそ  
旭張おむつらまのあゝ  
塩買し透くあらる舟子とを  
まむ柳の枝くまきこけ  
蜂の色ぬくくの鳥く遊くまん  
あくるあとの柳かゝる連  
誰を待二階のまうらぬら  
上うくあつをまよふ之線  
水漉よ舟の田毎も遠うく  
園、柳、木

漆の杓の散れくしこり  
瘡疾さうくもあまの船の舟  
あうまの八歩引をうらんと  
音あそ茶亭の袴のちくはく  
あうのよあつ残は灯と  
墨よや四社のりしあま自よ五  
池の蛙くあつあつと

几圭考人の懐旧之辞

其甥庵杜口誌

曲終く不見江上数峰青水繞くくろくく  
 みくくをばむいほくを思少壯のころを善歌  
 の多を解あむくくをば廢くく享保の末  
 片くろの野月泉り洛く漂客くろを柳く  
 暗みくくせちく風月をとしむ句のほろを  
 空くを庵昭平くくをばあまをばくく  
 清く沙く深く俗中の雅をせめて周く  
 世く賞くく余刻頸の周ばくく城山の

夕渭水のあくく花く雪く意を委ねく  
 寛保の比の更く浪華の秋生くくはせえ  
 いその形るくく乃く温ゆく  
 ゆきく薬師の光くあく一日く句の吟  
 ありくをなちくくをばしよよと  
 余の昔くくみく佛堂あく  
 鳥雛子月待くく法確くく車の  
 楳のくくはくくはふくく老の  
 けくくはく水あくく日おのや方を

たらしめ方と累々しむる追慕のたらし

そしり筆を揺しむ

正當十二月二十三日

追福之俳諧

何れもやうな事をせむしと描り

杜口

たかやまのうしろの内の内 九董

一筆の半々の篤よとゆふりそ 和流

ふのしつゝおのづかしのさる 口

舟の江々舟のいとや揮きん 董

隔多の舟のあまふ切と廉 流

新渚の風きよの嵩きん 口

面、癖ありき僕うとらん 董

至中とれた長者の相も久 流

梅香の庭より宇佐の灯籠 口

ふれもつゝはゆりしと髪は替 口

物見車より匂のきつ 董

きんぬ氣はゆ風の加減ふり 流

おもてをばはくし 大兵 董

庵屋つゝ親のふ附そ慕ふ 流

鷗拾ふまのぬり 月 口

燈をとも今休むしの花衣 董

二十五弦のちり も用し 雷文

け作給ハ亡父の旧識の二老を愛ししとて

二十五回之作善のころんはしり不破氏病

篤くして起こすあはらぬか純い息の元

いづちとす侍りを唯息のけしはるは

とありておしりつ折みぬをうくも亡父の

正當あはらつておまふ命のほどもおむり

あはとあておのり松の上よりひさし

の短冊を預るなり

いづれはあはのるをまもるは向ふ 和流

うは厚情のせしめりうらまを感懐し

うは清やそ牌おるし海をもる亡霊も

あはら其至誠をまもるしなり

一とく集撰しけるなり

あはらも嘯れり乃柳らぬ 四方田氏 一扇

逸垣より掃除のころ水戸 三浦氏 梅貫

題大竹講

珍しくは蠅のゆく歩や落葉の浪 入江氏 鳥門

日つをりし雨の口を柳 小野氏 光甫

一ふゆ氏孤舟余り幼時の一うさぎの句をばそ

両吟旅と如くかの菊おんこ入集せり

あつと之十余日の昔こころ

あつと之十余日の昔こころ 小野氏 孤舟

花をばあつと之十余日の昔こころ 栗津氏 青咲

指をねらひて人なきをり 栗津氏 嫩草

もつらるる風の蔓やげさるれ如 栗津氏 斗文

えゆ凡ま翁節分の誓 栗津氏 力まのりあしむをて

きののきに杖もたしをり 栗津氏 子夷

今に二十餘年の 栗津氏 星があらはれ

我の豆も吾のち 栗津氏 雷文

やこ毛のもを 栗津氏 天の恩いり高

寒内 栗津氏 九董 拜

月以所習會文趣見同記之

下巻

神指のさくら松と神茶湯東都天府  
 え日とげのりふ所る門田中松化  
 けふや花をさほきの為少菊  
 え日や鳥とりの心も如宿舟孤舟  
 朝もあふの山とりのし余を伏水洲陸  
 え目の化粧も多し十二苑の負銀柳  
 ぬくぬくみたり活るり河柳、鳥睡  
 芥搦んらして蛙と遊ぶ女うぬ魚赤

下り羽子と余る男はちうと孤山  
 正月や荒神松と梅の香媒之  
 春ぬるるぬるそとあやいふと移月  
 あく破の治めをさうとあつと其汀

春日

おげりや泥腸氣くらとん壱几童  
 栄漬のけしきをたひあ草の賞山  
 注連縄や梅さく宿の原をさう逸馬  
 なるや梅咲らう空佐日記真乙二

下巻



うがむらうちりし地衣の月 路人  
音痛くぬれいさるうきまはる 批如  
嫁送る管杭灯籠 かなり月 <sup>十二</sup> 席風  
飛ぬけりきをうぬも人のこころ <sup>下</sup> 杜若  
左菊を誰法とらん侍をきき 又射  
形傳や宿うとくらの春の匂 二村

新嘗

こころの祝をゆふさる <sup>下</sup> 几董  
志く梅の世うらぬふく <sup>下</sup> 尾全

ちか々の口ぬるる <sup>下</sup> 何来 <sup>玉シマ</sup>  
岡とく <sup>下</sup> 蛙 <sup>池田</sup> 田賦  
蕨おく <sup>下</sup> 柳 <sup>信</sup> 柳莊  
ふ <sup>下</sup> 午時持 <sup>下</sup> 如夢

屯のうら

吉州 <sup>下</sup> 完山 <sup>奥沢</sup>  
あ <sup>下</sup> 女 <sup>伏</sup> 帆 <sup>只</sup>

新嘗

光 <sup>下</sup> 董

あつの歌

於於のうう庵大まね給ふ正巴  
遊ちやまの東ちやまてうまへ松鳥  
給美ういせの下向を待日亦池田 象雪  
げさうひさきをむうし文衣伊丹 趙舎  
る際も十日の遊や去う 佳棠

丹波のうら

はのまのあゆるや

うみあて星のまのうらまのま  
ひうまの家を傳うまのま 亀

放ちやまの灯のまのまのま 星府池田  
大まの散日やまのま 牡丹伊丹 竹外

静坐

睡氣のまの魔のまのまのま 几董  
みうまの犬の鼻のまのま 雀のま  
蝶のまのまのまのまのま 未松  
ひんりのまのまのまのまのま 豆のま 万花女  
まのまのまのまのまのまのま 如菊  
つまのまのまのまのまのまのま 麦のま 士巧灘

い焼くひ苗るちや火さしし豊後 青容

龜の脊の土色しある暑下薬男

涼さのほのくおらる垣たイタミ 東瓦

あの日やあわきき凡の不感士川

はる田ちとしろく 几董

ま物のもほくありし足駄十二 菱湖

さけさやされて咲花十二 嘯風

らつあきとあたる夏の都下 芦村

うらうらう角ちあつ風結下 田福

尿しこころの蜂の色暑し 路人

庵丁のまきふのけや磯 贈 呂吹

出ほしやさきしふ袖の下涼 枕如

涼しきや指きおらるの夏荷 定雅

二村の軌押しと溜く流る下 管鳥

病中記

瘦脆や梅を追ほる力あふ 春香

白蓮や心もそひぬあふ 谷水

東奥

秋の詠

江戸

夕月の色中吼るや山乃犬成美  
棒探る小家のつらや家の秋 完来  
露の毛えらうむら 今も所 海人  
秋鳥の花えんまゝる 蝶の乳 熊三  
縮つるよりちこさなをよみ 女所 末尾  
柳よの秋もさけらう 東の雨 佳棠  
小菖とく大鶯の埃かゝるる 呂吹  
沙のやまゝるまてワは逢水 宗宗

あま秋風うつくしんをみかたの池 定雅

あまのそらうつくし秋並つと女鳥よ 桃李

月前懐古

あゆや朱雀の鬼神くさて 高尾 九董

と〜回を秋よりあし正満ひを 春坡

此海舟海いつき秋りん秋の昏 是岩

秋波江に秋ひえ

水乃月柳の葉とく海さきより 二村

切あそこのめ海さきよりあま南の海 一兄

展子

戸をくく伏人の宿や秋寒か離士喬  
遠く来てあふけしは鴉の色東武恭里  
こまほせて九日を菊の都山蘭

新日山秋山秋山

何の木ともみらるるさる中奥列几董  
暮むらう秋寒さるるいやはれ奥列秋來  
小水さあ隣の道元ゆめさる伏水橋仙  
秋寒の昼よりさるる皆のあき伏水鶉園  
待し基うらさるるあきの秋伏水其韻

秋の秋

おらや御幸ありとる秋のあき伏水誰駒  
初秋やはしめて秋のさきはく伏水万容  
さるるや鳥を怖れ鳥羽伏水几董  
こもるや啼くあきる夕鳥伏水楚尺  
さるるやるるさるるさるる楚山  
蓮花や池よりさるるさるるさるる伏水香  
あつるうらさるるさるるさるる伏水東籬  
秋風の炭ひさるるさるるさるる伏水秋莊

五十二

打割一氷にほりぬ 石の土姐愛  
のり箸をくもてあはしむる由前山 批波 李列  
志とくくく水のくくあるまゝの如く  
居層のふきにほしむ霞うさ 邦洞

少海江

既中多し妹よりゆくぬみきき  
以合わさるるうら 田原 毛條  
足もくく鳥のりけやぬみきき  
物中へ笑ひ進みゆくん雪のくく 拓南

つらぬよ山嶺や 取の雪 靖波  
あつよよまぬふにまゝと 酒 羽毛  
ワのくくやぬみきき炭よまゝと 山 山  
紙の着るくくくくくくを同じく 路曳

草庵

二度よりの幕とりのる落 本董  
寒月よ二交齒をくくくくくく 丹波 芦月  
そ月や南大門より我ひより 兎山  
起るくくくくくくの難通 星池

おのりてあしきやどした世に  
暮るゆくりや嗟詫ら老の坂心  
りとの墨をのりや指ゆるみ五  
去年の冬三餘齋主人の  
短冊を  
と侍りける年  
りや馬の脊をけり煤と雪  
のりや大世日の夕うら  
八十の老し親あまを  
几童

天明五乙巳之歳立秋日

新将後集としてるの  
雑談と何の  
雑談と  
あまの浦の雑談の連  
新の集載る雑談とよ  
あまの浦

さう角の雑談う  
法師のわらわら  
さうの  
乃

よの書の中にも  
白花のおも

下巻終

Handwritten text in vertical columns, likely a list or record. The characters are in a cursive style, possibly representing names or titles.

聖徳太子御宇

若狭守

中

ノ



立書上東御

平野

合

衛

書林

皇都新町通一條下町

近江屋新兵衛



